

らが優れているのかということに関しては、コントラバーシャルであると考えられた。また、神経機能回復に影響を与える因子として、動脈瘤の大きさが特に回復の妨げになるとの報告は認められず、年齢、糖尿病合併の有無、治療までの期間、術前の動眼神経麻痺の程度などが予後を左右するとした報告が多く認められた。特に、治療までの期間が短ければ短いほど良い神経機能回復が得られていた。クリッピング術、コイル塞栓術に関わらず、神経症状の出現より早期に治療を行う方が、より良い神経機能の回復が望めると考えられた。

8 超急性期脳主幹動脈閉塞症に対する rt-PA 静注+血管内治療

～当院にて施行した7症例の検討～

森田 健一・佐々木 修・山下 慎也
渡辺 直人・中村 公彦・中山 遥子
小池 哲雄

新潟市民病院脳神経外科

【目的】脳主幹動脈閉塞症例においては、rt-PA 静注療法では急性期に血管開通することは少なく患者の予後改善が期待できないことが分かってきた（当院にて施行した全38例中の内頸動脈閉塞症8例、中大脳動脈近位部閉塞症1例は症状の改善なし）。

そこで、rt-PA 静注療法が無効であった患者に対し局所血栓溶解療法の併用を臨床研究として計画し安全性、有効性を検討した。

〔症例〕2009年04月～11月の8ヶ月間にrt-PA 静注+血管内治療併用療法を行った7名を対象とした。対象者の選択はrt-PA 静注療法適正治療指針に従った。

【方法】脳主幹動脈閉塞発症3時間以内の患者さんにrt-PA 静注療法を開始し、脳血管撮影を行い30分経過にて再開通が得られなかった場合、閉塞部位に対し残量のrt-PAの局所動注投与と機械的血栓破砕術を行った。rt-PAの局所投与は静注量と合わせて(0.6mg/kg, 最大60mg)を越えないようにした。

【結果】7例の平均年齢は70.6歳、閉塞部位は内

頸動脈2例、中大脳動脈(M1)2例、中大脳動脈(M2)1例、脳底動脈1例、発症時のNIHSSは平均20.4点であった。全例tPA静注により再開通は得られず、血管内治療にて50%以上再開通は4例(57%)、症候性出血2例(28.6%)、3ヶ月後のmRS 2以下は2例(28.6%)、死亡1例であった。

【考察】rt-PA 静注療法にて再開通が得られないが併用療法により再開通が可能となり予後の改善が可能な症例がある。術中に出血をした場合は症候性となりうるため慎重な手技が必要である。今後血栓回収デバイスの使用により再開通率の改善が期待される。

9 Optic canal unroofingの進化：自験例での検討

小澤 常德・倉部 聡・渡邊 徹
相場 豊隆

県立新発田病院脳神経外科

【はじめに】paraclinoid 動脈瘤直達手術にoptic canal unroofingを行った5年間の自験例3例を報告し、最近開発された骨メス(Ultrasonic bone curettage; (Sonopet UST-2001) 導入に伴う、手術手技の進化の過程を振り返った。

〔症例〕SAHで発症した56歳女性の内側上方に突出した径2cmの動脈瘤に対しmicrodrillによるoptic unroofingを行った。ある程度の硬膜損傷は避けられず、optic strut 削除では極めて慎重な操作を要した。最近経験した、視野障害で発症した71歳女性の内側上方伸展した径2.8cmの動脈瘤、および頭痛精査で発見された69歳女性の上方突出した高さ8mmのbroad neck 動脈瘤の手術では、骨メスによるoptic unroofingを行った。硬膜損傷のない微細な操作が、術者の過度な緊張なく可能であった。

【考察】骨メスは、CUSA様のハンドピース構造で、25kHzの超微細な振動(ultrasonic oscillation)をおこす巾2mmの先端が、自動イリゲーションシステムと一体となったもので、先端部は一方にカーブしている。先端部のrotationが全くなく、